



新春企画

第1部

輝く人権 「新春座談会」

あけましておめでとうございませす。1月号の輝く人権は、連載70回特別企画！映画という手段で差別や偏見と闘う中山節夫さん、交流を通じて差別のないまちづくりに取り組んでいる吉田和美さんと大津町の職員で新春座談会をお送りします。

文部科学省特別選定作品

「新・あついで」

昨年、各地で上映された映画「新・あついで」は好評で、上映期間も延長されました。観客の心をとらえましたね？

【中山】私は合志町(現合志市)に生まれ、この「壁」の中の人たちと交流をして育ったので、この映画には監督としてのオリジナリティをぶつけました。映画は感性で見えるものですが自分自身に感動がないと人を感動させることはできません。ハンセン病の理屈だけなら論文で済むわけですからね。



なかやま せつ お
中山 節夫さん

映画「あついで」や「新・あついで」の監督。熊本県合志市(旧合志町)の出身



かたやま ふみ お
片山 文男さん

役場人権推進室 課長補佐兼人権推進係長



【中山】私は、役場人権推進室として多くの人に映画協力券の購入をお願いしました。中には、本当に完成までこぎつけるのか心配する人もあって、完成した時は、人のつながりに感謝し、うれしかったですね。映画会には親子連れが多くて、若い人の感性に響くに違いないと思う、明るい展望は的中したと思います。

【中山】高校生の頃、終戦を描いた映画を見ましたね。片方の足をなくし、虫のわいたその青年の足が、ラジオから流れるジャズのリズムを刻むという、映像のコントラストを覚えていきます。その時、私は平和のすばらしさと戦争を許さない信念を持ちました。映画というものは、ワンシーンの記憶が自分の生き方に役立てばいいんじゃないですかね。その点では、私も若い人の感性には期待していますよ。

【吉田】私は、寒い冬に陽炎を演出する美術さんの仕事など、もち場、もち場での動きの美しさが印象的でした。映像のでき上がりが良かったですね。でも、この映画は全国で上映されましたが、熊本弁でしたね。

【中山】今、大津町の話が出ましたが、監督は大津高校の卒業生でしたね。当時の大津町の様子はどうでしたか。

【中山】私は高校の3年間、合志町から自転車通学をしていました。大津町にはバスが何度も行きかかって、都会に見えましたね。おまけに、映画館が3館もあって、映画のはしごは日常茶飯事でした。また、初めて顔をしてもらった時には大人にでもなったようでした。笑い話ですが、家庭教師を頼まれて、自分の勉強がおろそかになったこともありました。

【中山】反対に、方言でないといふ心情が表現できないんですよ。皆さんが東北弁の映画を見て、方言が分からなくても俳優の表情などで感動が伝わってくるのと同じです。言語には映像を引き立てる役目があるということです。大津町には「じゅったんぼ」「ぜんなか」などの方言があった、聞けば想像することは容易ですよ。



よしだ かず み
吉田 和美さん

町在住。「新・あついで」に共感し、各地の上映会開催に尽力。



おおた あき こ
太田 昭子さん

役場給食センター副所長(人権対策担当者)